

一寸法師 5：帰京

「一寸法師」は、御伽草子と呼ばれるジャンルの作品です。御伽草子は物語の一種です。比較的短くて単純な筋書きを持つものが多く、南北朝時代・室町時代にさかんに作られました。この時代になると物語の読者層は庶民にまで広がり、御伽草子は女性や子どもを中心に多くの人々に親しまれました。

御伽草子は300編ほどが現存しており、その内容から6種に分けられています。公家物、武家物、宗教物、庶民物、異類物、異国物の6種類です。

テキストとして取り上げた「一寸法師」はそのうち庶民物に属します。庶民物には、身分の低い者が才覚によって出世し、高貴な女性と結ばれるといったサクセス・ストーリーが少なくありません。「一寸法師」はそうした立身出世談の典型と言えます。

「一寸法師」というタイトルは主人公の呼び名で、この主人公の背丈が一寸(約3cm)しかなかったことから来ています。

「きょうがる島」で出会った鬼と戦って見事に勝利をおさめた一寸法師は、ほしいものが何でも出てくる打出の小槌を手に入れ、普通の背丈になり、大金持ちになって、姫君とともに都に帰ります。一寸法師はやがて天皇の目にとまり、認められて出世します。3人の子どもにも恵まれて一族が栄えるというところで、めでたくこの物語は終わります。

ほんぶん しゅってん
本文の出典：

おおしまたてひこ わたりこういち こうちゆう やく むろまちものがたりそうししゅう しんべんにほんこてんぶんがくぜんしゅう
大島建彦・渡浩一 校注／訳『室町物語草子集』(新編日本古典文学全集63)

しょうがくかん ねん
小学館、2002年